

## ■ イエス様の呼び名…

「その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」イザヤ9：6

このイエス様が私たちに一体どういってお方であり、何を知ることができるのかということをお今日の聖書の箇所から教えて頂き4つの祈りを共にささげていきたいと思えます。

## ■ 祈り①…わたしと共感してくださる 不思議な助言者にすべてを打ち明けます

イエス様ご一行はガリラヤへ向かっておられました。この時、「しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。」(4節)と書いてあります。当時はユダヤ人はサマリヤ人を選ばないでいました。ユダヤ人にとってサマリヤ人は混血の民であり偶像礼拝もしていて関わりたくないという相手でした。しかし、イエス様ご一行はサマリヤをあえて通ったのです。イエス様というお方は私達を決して避けるお方ではないということをお今朝知りましょう。イエス様が見つめ、共に時間を過ごしたのは当時お金持ちとか権力を持っていた人たちとか、素敵な人というよりも罪人と呼ばれるような人達でした。この時もあえてサマリヤを避けて通り、井戸のそばに腰をおろして一人のサマリヤの女性を待っておられました。同じように、どんなに自分に避けられるべき理由があったとしてもイエス様は決して私達を避けません。目を背けることもしません。「不思議な助言者」という言葉は英語では「ワンダフル・カウンセラー」と書かれています。ある脳科学者は、「カウンセラーにとって強力な能力は助言したり知識の言葉というよりも共感することのできる能力である」と言います。確かに情報や知識をシェアすることや意見を言うこともできます。けれど、一緒に感じるということとは結構難しいことです。その人が悲しんでいることをあたかも自分のことかのように悲しむことは結構難しいことですし、もしかしら、その人が喜んでいることを一緒に喜ぶことはもっと難しいことかも知れません。泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜びなさいと聖書は言いますが、人間は「他人の不幸は蜜の味」なのです。けれど、イエス・キリストというお方はあなたとまったく同じように悲しみを悲しむことのできるお方、共に感じて喜んでくださるお方です。ですから、私達は恐れることなくすべてを打ち明けることができるのです。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私達と同じように、試みに合われたのです。ですから、私達は、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵の御座に近づこうではありませんか。」(7月14:15-16)

## ■ 祈り②…わたしを救うことができる 力ある神を、すべての心の部屋に迎えます

共感するということだったら人間頑張ればできる人もいるかもしれません。しかし、聞いて終わるだけでは本当の解決にはなりません。イエス様は共に感じ、泣き、笑い…それで終わるお方ではありません。そこから救い出すことのできる力あるお方です。サマリヤの女性は正午頃に水を汲みに来ました。当時は人々が水を汲みに来る時間は朝夕でした。つまり、サマリヤの女性は人との接触を避けていたのです。イエス様は女性との対話の中で彼女が生きていくために求めてきた水から段々と霊的ないのちの水へと話しをソフトチェンジしていきました。そして、女性がイエス様の言われる水をくださいと求めた時、突然「あなたの夫をここに呼んでください。」と話しを変えました。なぜなら彼女の暗闇がそこにあったからです。イエス様はただ励まして終わるだけではなく、この女性の根本的な暗闇に光を当てて待つておられたのです。愛を求めて5回も結婚した女性は、どれほどの悲しみ、後悔、怒り、妬み…があったでしょう。そして、町の中でも後ろ指をさされていたため人々との接触を避けて水を汲みに来る生活だったのだと想像できます。女性として決して触れられたくないその暗闇にイエス様は突然スポットライトを当てられたのです。イエス・キリストは私達たちのすべてを知って、本当に変えられなければならない部分、本当に解決されなければならない問題、本当に癒されなければならない問題を直視し、そこに救いの御手を差し伸べてくださる力あるお方です。イエス様に希望があるのです。私達にはもしかしたら喜んでイエス様を迎え入れられる心の部屋もあれば、掃除するまで待つてくださるとイエス様を迎え入れることを拒み続けている心の部屋があるかも知れません。けれど、イエス様は「その部屋を掃除するのはあなたではなく私だ。だから私は十字架にかかったんだよ。私をその部屋に入れてくれないか。」と優しく語りかけてくださっています。私達のこととは、「イエス様、私の心の部屋に来てください。」とお迎え

することです。イエス様だけが力ある救うことができるお方です。

## ■ 祈り③…わたしの最低、最悪、最弱な姿を 知っている永遠の父に、私は愛されています

どんなことがあっても私を愛し守ってくれる存在。それが父という存在です。サマリヤの女性は自分のすべてを知っているのにそれでも命の水を与えるから道であり真理であり命である私をただ信じなさいと決して自分をあきらめなかったイエス様の愛に触れました。神様はどんなことがあっても変わらない父です。たとえ私達の神様に対する情熱が消えてしまった時でさえ、神様の私達に対する情熱は決して変わることもなく注がれているのです。この愛に気づく時にサマリヤの女性のように私達も立ち上がることができます。

## ■ 祈り④…わたしと神との関係を回復させた 平和の君を通して素直な礼拝をささげます

根本的な癒しと解決がイエス・キリストにあるということはわかったサマリヤの女性でしたが、エルサレムでなければ礼拝してはいけないというユダヤ人の言葉、かつての神殿は廃墟となっている現実からどこで礼拝したら良いかわからない…と礼拝できない理由を並べます。これは神様との関わりは今の自分にはできないという全うな理由を並べているのです。私達も同じように礼拝できない正当な理由をいつももっています。この教会じゃ祈れない、このメッセージでは恵まれない、この環境が、時間が許さない… etc. けれどイエス様は「目の前にいるわたしがメシアだ。わたしがそれだ。」とサマリヤの女性に言ったように私達にも語っています。礼拝とは生ける神との交わりです。交わりの中に癒し・回復・救いがあります。そして「霊によって礼拝する」とは、自分の聖書の知識とか良い行いとか上手な歌とか素晴らしい祈りとか献金の額とか礼拝っぽい照明・音楽…といったようなものに依存するものではありません。イエスを主と信じる私達には主の霊が豊かに注がれているのです。この霊が私達を礼拝に導くのです。この霊が私達を励まし、慰め、前進させ、大胆に今日も神の御座に真心から出ることをゆるしているのです。「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」(7月14:6)「聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。(1コリ12：3)「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。」(使徒2：17) だからこそ子どもから大人まで神の霊によって礼拝ができるのです。どんなにイエス様のことを頭でわかっていなくてもイエスを主と信じる者には主の霊が注がれているのです。だからこそ、私達にはいつも礼拝できる理由があるのです。「真にこそ礼拝する」とは何でしょうか。真・真理といたらイエス様であり、みことばです。そしてもう一つは私達の素直な気持ちです。きれいに見せた上手な言葉でなく素直な言葉でいいのです。素直な気持ちを神様に向けていくことができるのです。愚痴や悪口なら神様に言いましょう。教会から陰口、悪口を追い出していきましょう。全部神様は受け止めて下さいます。そして、素直な心をイエス様が造り変えて下さるのです。敵を愛する心は私達の努力からは出て来ません。素直な祈りをささげていきましょう。そんな豊かな交わりを回復させて下さったのがイエス様の十字架のみわざです。イエス様の十字架によってそんな生きた純粋な素直な取り纏わない自然体な神様との会話がいつでもどこでもゆるされているのです。

## ■ イエス様と出会う時人は変えられる…

人との接触を避けていたサマリヤのこの女性が生活の手段である水がめさえ置き忘れて走って行って、町中の人々に主を証しし始めたのです。イエス様と出会う時に人は変えられるのです。そして、町の人々はこの女性の言葉によってイエス・キリストを信じたと書いてあるのです。私達の言葉によって周りは変えられていくのです。それは私達の雄弁な言葉ではありません。イエス様と出会ったこの事実が私達を福音の伝達者にしていくのです。イエス様と出会うなら癒され、解放され、救われ、私達の言葉が恵みによって用いられ家族が、職場が、学校が変えられ、この国さえも変えられていきます。そんな力ある御業を主は起こすことができます。

(要約者:全本 みどり)

(2018年10月28日)